

インタビュー 救う会新潟 会長 高橋正氏(たかはし ただし)



高橋 正(たかはし ただし)

TADASHI TAKAHASHI

プロフィール
昭和11年新潟市秋葉区(旧新津市)生まれ。

昭和29年新潟県立新津高等学校卒業後、昭和49年新潟県議会議員に初当選。以後、平成19年から19年まで拉致問題地方議会全国協議会副会長を務めた。

平成23年、救う会新潟の会長に就任、北朝鮮による拉致被害者救出に向け精力的に活動中。

◆ブルーリボン運動を始めたきっかけは何ですか？

私が北朝鮮による拉致被害者の救出活動のための署名運動を始めたきっかけは、1997年に安明進(アン・ミンジン)という脱北者から、「横田めぐみさんを拉致した」と言う話があがった事です。「そんな事は許されなさい」という思いで、抗議の声を上げようと、全国に先駆けて新潟で拉致被害者の救済を求める署名運動を始めました。

私(高橋氏、元県議会議員、現在の「救う会新潟」会長)、横田夫妻の5名で始めました。署名の第一号は当時の新潟県知事であった平山征夫氏からいただきました。その後、古町などの街頭で署名活動や募金活動を始めましたが、始めた当初は中々うまく行きませんでした。1950年代後半に政府により行われた「在日朝鮮人の帰還事業」*などで、「あの国はおかしい」と言う方や、夢の国ではなかった」と証言する方、脱北して来る方が出てきました。当時、北朝鮮は「地上天国」などと呼ばれていた時代でしたので、

一般的に「非常に良い国だ」と信じられており、なかなか署名が集りませんでした。新潟県議会議員をしていた私は「売名行為だ」と罵られた事もありました。そんな中、2002年に小泉純一郎総理(当時)の北朝鮮訪問により、拉致被害者5名の帰国が実現しました。この盛り上がりにより、署名運動だけではなく「ブルーリボン」を作りました。作った当時は本当の布リボンでしたが、今は立派なバッチになっており、様々な形もあります。第二次安倍政権下の今こそ、拉致問題を解決する最大の機会です。皆様の力を借りて活動を盛り上げ、一日も早く問題を解決させたいと思います。

古屋圭司(ふるやけいじ) 拉致問題担当大臣 突撃取材「2013年拉致問題の解決に向けて」



◆問題解決に向けて政府、行政が取り組んでいることは？

拉致問題に関しては、与野党が党の壁を越えて連携・協力している重要な課題です。与野党拉致問題連絡会議を作り、全閣僚が本部長となる「オールジャパン体制」で取り組んでいます。

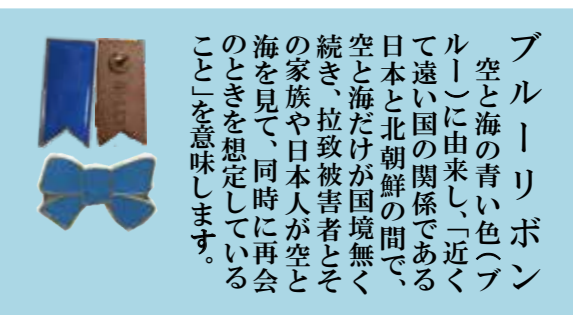
また、有識者会議なども立ち上げており、考え方の違う有識者により、活発な意見交換が行われています。会議内では広報戦略において新しい取り組みも始まっています。その取り組みで世論の支持を得ることができれば、キャプチャーを使って戦略的に広報活動を行う、新しい試みも検討されています。

◆拉致問題解決へ我々ができる事は？

拉致問題のことをできるだけ多くの国民に共有してもらえよう、青年会議所の皆さんには、是非、拉致問題のシンポジウムを積極的に開いていただきたい。そして、日本国民の全員が拉致問題を考え、北朝鮮に拉致被害者を返せ！という強いメッセージを出していただきたい。これが解決につながるのです。新潟青年会議所はよくやって来ていますね。アニメのパフレット、あれは良かったです。私が地元で拉致のシンポジウムを行った時に配ったのですが、400部があつたという間になくなりました。横田さんをはじめ多くの方が拉致された県ですから、

◆現政権で拉致問題を解決する決意をお聞かせ下さい。
安倍総理は自身の就任の際に「必ず拉致問題を解決する」と明言しました。このままではつきりと明言した総理は未だかつていません。また、私も安倍総理と十数年間この問題に取り組んできた同志であり、その私を拉致問題担当大臣に指名していただきました。ですから、私が「最後の担当大臣になる」という覚悟でこの問題を解決する、とはつきり明言しました。これが何よりの決意です。

今はこの問題に対する組織強化だけでなく、世界各国との連携も含めて、オールジャパンでありとあらゆることに取り組んでいます。北朝鮮包囲網を通じて拉致被害者全員を取り戻すつもりです。



ブルーリボン
空と海の青い色(ブルー)に由来し、「近くて遠い国の関係である日本と北朝鮮の間で、空と海だけが国境無く続き、拉致被害者とその家族や日本人が空と海を見て、同時に再会のときを想定していること」を意味します。

国際政治アナリスト 菅原出の目



北朝鮮による拉致問題は国際的な問題とは言っても、日本人の拉致問題は基本的には北朝鮮と日本の2ヶ国だけの独自の問題です。ですから、第三者の立場であるアメリカが助けにくれることはありません。他人に任せることなく自分自身の問題として取り組むことが重要です。日本政府は、表向きの外交手段はもちろんのこと、秘密外交も含めた裏工作など、様々な試みをどんどん行うべきです。その際に、マスコミなどは視座率を取るために自分たちが良いように情報を利用しますが、これは基本的に人道問題ですので、一定期間を設けてマスコミと報道協定を結ぶことも必要だと思います。日本国民として、市民運動「救う会」などと協力して、政府の活動を支えて行きましょう、その意味でブルーリボンはとても有効です。

引き続き青年会議所としてがんばってください。JCCのOBとして応援しています。

担当大臣・拉致対策本部として、協力できることは何でも協力します。お互いに手を取り合って協力していきましょう。



大臣からも称賛された、新潟青年会議所の作品マンガ「家族愛」



新潟から始まる 「ブルーリボン」市民運動

11年前の2002年9月17日に小泉純一郎首相(当時)が、北朝鮮の故金正日(キムジョンイル)総書記と会談した際に、北朝鮮が日本人の拉致を認め正式に謝罪したことから、北朝鮮との間に拉致問題が有る事が発覚し注目を集めました。北朝鮮側の発表により拉致被害者13名中の5名が生存(蓮池夫妻・地村夫妻・曾我さん)8名が死亡と伝えられました。結果、5名の帰国が実現し、北朝鮮による拉致問題に対して日本国民の関心が高まりました。

署名運動だけではなく拉致被害者救出の象徴として「ブルーリボン」の製作もこの頃よりはじまりました。

北朝鮮側には日本側の動きが「筒抜け」のようなので、署名活動やブルーリボンなどの活動が国レベルで盛り上がりを見せ、日本国民全員が拉致被害者を返してほしいと思っている事が北朝鮮から容易に見えることが大切でした。

ブルーリボン運動は新潟から始まり、全国へ広がっている市民運動です。ブルーリボンを皆さんに装着してもらい、北朝鮮に対して、明確に被害者救出の意思表示していくことが大切です。

Quiz III 2003年に帰国した拉致被害者の中には、拉致被害者リストに名前があがっていない方がいました。その方は次の内どなたでしょうか？
1. 蓮池薫さん 2. 地村志保さん 3. 曾我ひとみさん 答えは13ページ

拉致問題

拉致問題